

ジュゼペ・デ・リベーラの署名に関する一考察

川瀬佑介(ニューヨーク大学大学院博士課程)

本発表は、スペインに生まれナポリで活躍した画家ジュゼペ・デ・リベーラ(1591-1652)の署名について論じる。初期近代の芸術家の署名が、作品の真贋鑑定以外の文脈で積極的に論じられるようになったのは主に 1990 年代後半以降のことで、イタリア・スペイン美術の分野においては、L.マシュー(1998)、C.ギルバート(2000)、R.ゴッフエン(2001, 2003)、そして K.ヘルヴィック(2001)といった研究者によってその地平が切り開かれてきた。

リベーラの署名は、大量の署名作品が現存するという数量的な観点、語句の組み合わせの多様なヴァリエーションという観点、そして字体のカリグラフィックな様式という三つの観点から、同時代の芸術家の例とは際立って区別される。しかしながら、それらに関する本格的な研究は、まだ行われていない。本論は、ルネサンス以降の芸術作品における署名の歴史と 17 世紀当時の習慣を鑑み、リベーラの署名を作品の芸術的な内容・意図、そしてそれを通じて表明される画家の社会的・商業的な意図と関連付けて論じようとするものである。そうした考察を通じて、署名が画家の制作、ひいては作品の受容と流通に際して、どのような役割と意味を担っていたのを明らかにしたい。

発表の手順としては、まず、リベーラの署名の展開を年代順にあとづけたのち、語句の表記や組み合わせについての簡単な統計と、作品の主題、フォーマット、注文主といった要素との関連について考察を加える。それに続いて、画家がナポリでの制作を軌道に乗せ、同地の主導的画家としての地位を確立するようになった 1620 年代中後半の作品とその署名を素材として、署名に見られる語句のヴァリエーションと字体の問題に焦点を当てて論じたい。

具体的には、この時期にのみ散見される”faciebat”の表記(1624 年の《聖ブルーノと聖母子》など工房作を含め 4 点)に込められた意図とミケランジェロやティツィアーノに見られる先例との関連について、1626 年の騎士団号の授与と署名表記の変化について、1620 年代初中半の版画制作と同年代末に定着する署名表記の規格化との関連について、そしてファーストネームの頭文字”J”の装飾字体の意図などについて考察を加える。こうした議論を通じて、発表者は、リベーラの署名がランダムに与えられていたものではなく、過去の大芸術家に対するオマージュやエミュレーション、または自らの社会的地位の向上といった、芸術的・社会的意図を伴って記されていることを指摘したい。同時に、そうした意図はベラスケスら同時代の芸術家の署名にもしばしば認められるものであり、リベーラの署名から当時の芸術家が置かれていた社会的環境を読み取ることが可能であることも明らかに出来ればと思う。